

【タイトル】「青年部会が 東日本大震災でボランティア活動」

【日時】平成23年5月26日（木）～28日（土）（2泊3日）

【場所】岩手県大槌町

【概要】

がんばれよー!!大きな声援を受け出発する。偶然、親会の総会の日程と重なり、懇親会の途中で中座することとなった。これから被災地に向かう旨を懇親会場で報告すると、少々照れくさいが江東東を代表していくのだと気持ちが引き締まる。

目的地は**岩手県大槌町**。観光船が旅館の上に乗上げたという、大津波で壊滅的な被害を受けた町のひとつだ。最終の新幹線で盛岡市に入り、翌早朝、市運営のボランティアバスで一路、大槌を目指す。これから有志7名による二日間のボランティア活動が始まる。

途中、美しい田園地帯を通るが、沿岸部にさしかかると風景は一変する。瓦礫の山が延々とつづく。その膨大な量だけでも復興の困難さを思い知らされる。



甚大な被害を受けた大槌町

午前9時半到着。被害の激しかった町中心部は自衛隊が重機で瓦礫を撤去しているが、我々の仕事は被害の比較的少なかった住宅地で土砂と瓦礫で埋まった排水溝を復旧させること。かなりの重労働だ。暑さと防塵マスクの息

苦しきでクラクラしてくる。「重機ならすぐ片付くのに」と思ったが、掘り進めるうち人手でやる意味がわかった。



作業開始

泥に混ざって出てくる食器、写真などは別にしておく必要がある。被災者にとっては大切な思い出の品かもしれないからだ。一瞬ドキッとするものが出てくる。片方だけの子供靴、名前が入った筆箱、ぬいぐるみ、たどたどしい文字で書かれた作文。これらの持ち主である小さな命は助かったのだろうか、そうであってほしいと強く願った。アルバムも出てきた。ごく当たり前の生活という幸福。災害は非情にもそれらを奪い去っていった。

行き帰りのバスで話したボランティアセンター職員の女性は『町は壊滅したが、これから心配なのは、光明が見出せない状況が続いたときの被災した方たちの心の壊滅。』と語る。

夜、盛岡法人会青年部のメンバー^{ねぎら} 芳いにと夕食に誘ってくれた。2年前の「全国青年の集い・盛岡大会」以来の縁だ。「仕事をつくる復興援助が必要」が彼らの主張。食事などを「与える」援助が続けばプライドが傷付き、希望も見出せない。全国シェアの2割を占める水産業に優先的に投資して、被災した人々が働き、収入を得て自らの手で復興を掴み取っていける仕組みをつくるのが本当の「援助」と感じた。

今後も継続して支援をできるように自分や会社を強くしていこうと気持ちを引き締め、被災地を後にした。がんばれ東北！がんばろう日本！
(佐)